

## 新学習指導要領と特別活動

長 島 明 純

### はじめに

今回の新指導要領の大事な柱は、生きる力と人間関係の力であるが、その基礎を特別活動が担っている。

新学習指導要領の第6章第一「目標」では、

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

とある。

現在、不登校やいじめやなどの問題は、どの学校でも起こりうる状況にあるが、これらの生徒指導の問題の予防・対策には、教師対生徒の関係だけでは難しい。集団を変える特別活動の力は大きい。特別活動の大事な柱は話し合い活動であるが、これができれば学習の基礎ができる。

しかし、現場において各教科と比べると「特別活動」に対する意識は低いように思う。現場の若い教師からは、話し合い活動は大事だと思うが話し合いが深まらない。特別活動のどのように進めたら良いのか分からないという声も聞こえてくる。また、学校やその地域の教育委員会などで、話し合い活動のマニュアルなど作成している所もあるが、それでうまく機能していない場合もある。

今回の指導要領の改訂で、これまでの反省を踏まえて、改善の方向を目指したことの意義は大きい。しかし、教科の学習以外でやるべき内容の全ての受け皿として、特別活動が考えられているのかと思える程、多くの内容が盛り込まれている。

これは、現在の教育的な課題の多くを、特別活動が担う可能性を秘めているということでもあろうが、多くの学校では、特別活動の時間の確保が難しく、足らない時間を休み時間を使うなど工夫しているというのが実態ではないだろうか。このような状況を考えると、実際の運用にあたっては、まず、時間の確保が大きな問題となるだろう。

何でも取り入れてしまうというのではなく、現場の特性や状況を十分に考慮しながら

ら、指導要領が目指しているものを的確に把握し、それらが反映された教育活動にしていく工夫が必要である。

今回の改訂では、「自己の生き方」という言葉が、同じ小学校の「道徳」と「総合的な学習の時間」の目標の中に示されているなど、小学校の教育活動が有機的関連をもって推進できるように意図されている。また、中学校の特別活動の全体の目標の中には、小学校の特別活動の目標と同じ「自己を生かす能力」という言葉が入っている。更に「人間としての生き方」という、小学校の特別活動の目標の中の「自己の生き方」とつながる言葉も入っている。このように、今回の改訂に当たっては、小学校の特別活動以外の教育活動だけでなく、中学校の教育活動とも、これまで以上に有機的な関連を持って指導されることが意図されている<sup>1)</sup>。

これより、主に文部科学省『小学校学習指導要領解説・特別活動編』（東洋館出版社・平成20年8月31日発行）を参照しながら、創価大学教職大学院の授業である、「特別活動の計画、実施、評価」での学びも参考にし、その改訂の概要を、小学校の現況などと合わせて、述べてみたい。

## I 「生きる力」と特別活動

社会の激しい変化に対応するために、基礎基本の技能の習得やそれらを活用する力を育成などが、日本の教育においてもますます重要になっていることが、児童生徒へのPISAの調査などによって明らかになった。これまでは10年毎に変えてきた指導要領が、今回、10年を待たずに、改訂された背景には、このような教育を取り巻く状況の変化がある。基本理念としては「生きる力」を継承しつつ、その理念を再定義し、その力を育成するための具体的な手立てを明示する必要がでてきたのである。

その手立てが、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」（平成20年1月）の中で、生きる力の内容と要素例としてまとめられている<sup>2)</sup>。それを整理すると以下ようになる。

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・ 自己に関すること……自己理解（自尊・自己肯定）・自己責任（自律・自制）、健康増進、意思決定、将来設計</li><li>・ 自己と他者との関係……協調性・責任感、感性・表現、人間関係形成</li><li>・ 自己と自然などとの関係……生命尊重、自然・環境理解</li><li>・ 個人と社会との関係……責任・権利・勤労、社会・文化理解、言語・情報活用、知識・技術活用、課題発見・解決</li></ul> |
|--|

このように生きる力とは実践的な力であるといえようが、特別活動が、なすことによって学ぶことを特質とする活動であることを考えれば、「生きる力」の育成で特別活動の担う役割は少なくない。このような役割を特別活動が十分に担うために、今回

の改訂では以下のような改善点が示されている。

## Ⅱ 特別活動の改善点

中央教育審議会答申（平成20年1月）では、「特別活動の充実が学校生活の満足度や楽しさと深くかかわっているが、他方、それが子どもたちの資質や能力の育成に十分につながっていない」と、楽しいだけで資質能力などの育成につながっていないと批判している。

このような批判が生まれた背景には<sup>3)</sup>、特別活動が体験的な活動であるだけに、その学校や地域、子どもの実態によって、学校や学級によって、大きな差異が生じる可能性があることがある。それにも関わらず、これまでの指導要領では、特別活動の目標について、一般的にしか示さず、さらにその各内容については、目標すら示していなかった。何を目指して、どんな内容を積み上げ、どんな資質や能力を育てれば良いのかということが曖昧なままだったのである。

そこで今回の改訂にあたっては、「望ましい集団活動を通して豊かな人間性や社会性を育成する実践活動である」という特別活動の基本的性格や、その内容を、学級活動・児童活動・クラブ活動・学校行事の四つで構成するといった大枠は維持したものの、以下のような改善が図られることになった。

### (1) 目標に関する改善点

今回の新指導要領の大きな柱である、人間関係の力を育てる基礎を特別活動が担っていることを、全体の目標の中に「人間関係」という言葉を加えることで示している。これは、よりよい生活や人間関係を築こうとする、自主的、実践的な態度を育てるといふ、特別活動の性格を一層はっきりと示すためである。

この大きな全体の目標を受け、特別活動を構成している、学級活動・児童活動・クラブ活動・学校行事の各内容でも、その内容を通して育てたい態度や能力を、目標として明示している。また、道徳的実践の指導の充実を図る意味から、「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」という言葉が加わっている。

### (2) 各活動・学校行事の内容についての改善点

学級活動・児童活動・クラブ活動・学校行事の各内容の目標を明示しているが、以下、それぞれの内容について述べる。

#### ①学級活動

学級活動の活動内容を、(1)の「学級や学校の生活づくり」と(2)の「日常生活や学習や学習の適応及び健康安全」の内容で構成するようにし、各々の内容にも新たに目標を加えている<sup>4)</sup>。これら活動内容の名称によって、学級活動が子どもたちの「生活」そのものを対象にして展開される教育活動であることを一層はっきりさせたのである。

そして、学級集団の育成上課題や発達段階に即して、計画的に指導ができるように、低学年・中学年・高学年ごとに、その「内容」が新たに加えられ、いずれの学年でも取り扱う内容を「共通事項」として、新たに明示している。

活動内容(1)では、学校で行われる各種の集団による自発的、自治的な活動が一層効果的に行われることを意図し、「学校における多様な集団の生活の向上」という言葉が加えられた。活動内容(2)では、勤労を重視する意味から、係活動とともに、日常の清掃などの当番活動も計画的に指導するよう言葉が加えられた<sup>5)</sup>。また、「食育の観点を踏まえた」という言葉を加えることで、「食育」という観点の大切さも強調している。

## ②児童会活動

他の内容と同様、児童会活動でも、育てたい態度や能力を新たに目標として示している。この目標の中では、特に、年齢が異なる児童同士の間関係を築き、楽しい生活をつくるなど自分たちの学校生活の向上を目指して、進んで話合い、協力して実現しようとする<sup>6)</sup>、異学年の集団による自治的能力の育成が特に重視されている。

## ③クラブ活動<sup>7)</sup>

クラブ活動でも、異学年の集団による活動が重視されている。これまでもクラブ活動の年間授業時数が別表で示されなくなったこともあり、クラブ活動の実施される時数が減っているが、今回の改訂でも、特別活動におけるクラブ活動の授業時間数は示されなかった。さらに今回の改訂では、活動の充実を図るために、「クラブの計画や運営」「クラブを楽しむ活動」「クラブの成果の発表」の内容が新たに示されたことで、クラブ活動の時数の確保が難しい現状に拍車がかかる可能性がある。児童会活動での話合い活動の時間の確保の問題と同様に、時数の確保は大きな課題である。

## ④学校行事<sup>8)</sup>

自然の中での集団宿泊体験や異学年交流など含む多様な人々との交流体験、文化的な体験を重視する観点<sup>9)</sup>が、目標の中に示された。実際の運用に当たっては、指導要領の趣旨を踏まえて、その学校の置かれた地域の特性などよく考慮する必要がある。

## (3) 指導計画の作成と内容の取扱いにおける改善点

〔指導計画の作成〕

### ①全体計画及び年間指導計画の作成

今回の改訂で「特別活動の全体計画や各活動・学校行事の年間指導計画の作成」という言葉が新たに加わった。これは、特別活動を効果あるものにするためには、全教員の共通理解の下で、組織的に特別活動を取り組む必要があり、その前提となる年間指導計画が確実に作成される必要があるからである。

特別活動を効果的にものにするためには、各活動・学校行事が先にあってその内容を広げるのではなく、まず、全体計画の中で「育てたい子どもの力や姿」が位置づけられていることが大事である。その上で、学校教育目標→特別活動の目標→学年目標→学級目標→各活動・学校行事という段階を踏まえて、年間計画が作成される必要がある。

しかし、現在の多忙な学校の状況では、教職員の意識として、特別活動の全体の年間指導計画があったかどうか判然としないとか、あっても前年度そのままのような計画であるとかという学校もある。特別活動の年間指導計画がないという学校すらある。学級活動の目標はあるが、学年毎の目標はないとか、実際の特別活動の学校行事は、その担当の部署が計画案を作り、部として行事をこなすといった状況の学校もあるのではないだろうか。

このような状況を打開するためには、特別活動の全体計画や年間計画に対する、教員のモチベーションを高める必要がある。そのための工夫としては、計画の中に、育てたい子どもの態度や能力を、イメージしやすい具体的な表現で盛り込むとか、指導の重点がはっきりと分かりやすいものにするなどの工夫がある。普段から特別活動の指導計画を意識してもらうことで、それが子どもの教育へと反映させる。

指導計画の実施に当たって、「各教科、道徳、外国語活動及び総合的な学習の時間などの指導との関連を図る」ことが新たに加えられている。例えば、国語の話すこと・聞くことと能力、書くことと能力との関連で、特別活動の話合い活動を考えたり、道徳で示されている学年段階を踏まえた内容との関連で、特別活動の場を考えることなどあるだろう。なお、今回の改訂で、自然体験活動・ボランティア活動については、総合的な学習の時間で実施したことを、特別活動の学校行事で実施したことに替えることができるようになった。

## ②道徳実践の指導の充実

道徳実践の指導の充実を図るという観点から、指導計画の作成と内容の取扱いでも、「第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳の目標の基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、特別活動の特質に応じて、適切に指導すること」と明示されている。

これは、道徳実践の場としての特別活動の役割が重視されていることを意味する。今回の新指導要領の「道徳」の目標の中に、特別活動の全体の目標に入っている「自己の生き方についての考え方を深め」という文章が、そのまま入っている。全体の教育活動の中で、道徳と特別活動とが関連性を持ちながら展開されることへの強い期待が読み取れる<sup>9)</sup>。

〔内容の取扱い〕

### ①集団として意見をまとめるなどの話合い活動等の充実<sup>10)</sup>

よりよい生活を築くための合意形成をする話し合い活動や自分たちの「きまり」をつくって守る活動、人間関係を形成する力を養う活動などを重視することが明示された。よりよい人間関係を築く力や社会に参画する態度を養う上で、友達の意見をよく聞いたり、友達に自分の意見を聞いてもらえたという、話し合い活動の体験は重要である。

しかし、最近の子供は冷めており、話し合い活動へのモチベーションが低い。子供が本音の願いや気持ちを出して、他の人に聞いてもらえたという体験ができる話し合い活動となるために、教師がどんなタイミングでどんなことを発言するのが大事である。話し合い活動が活性化するためには、子供の願いや気持ちを引き出すものに、教師の発言がなっているかどうかが必要となる。このような話し合い活動の体験が、人間関係を形成する力の基礎を養うことになる。

②発達段階に応じた内容の重点化及び学級活動と道徳教育や学級経営等との関連

道徳教育と学級活動との深い関連を明示する意味から、「学級、学校及び児童の実態、学級集団の育成上の課題や発達の課題及び第3章道徳の第3の1の(3)に示す道徳教育の重点などを踏まえ、各学年段階において取り上げる指導内容の重点化を図るとともに、必要に応じて、内容間の関連や統合を図ったり、他の内容を加えたりすることができること」が示されている。

しかし、この特別活動の発達段階による内容は、その低中高の表現上の違いからだけでは、現場的には具体的なイメージがつかみにくいのではないだろうか。学習指導要領の道徳で示された発達段階による内容や、話し合い活動についてなら国語の内容Aの話すこと聞くことの発達段階の応じた内容などが参考になるように思う。

また、学級経営と学級活動の指導との関連が深いことを明示する意味で、「学級経営の充実を図り、個々の児童についての理解を深め、児童との信頼関係を基礎に指導を行う」との文章が加えられた。

③「異年齢集団による交流」や体験活動・言語活動の充実

小1プロブレムや中1ギャップの問題と合わせて、幼小や小中の連携が大きな課題となってきている。それへの特別活動の対応の工夫として、学校行事の配慮事項に、「異年齢集団による交流」を充実させることが加えられた。また、体験活動の充実を図ることが明示された上で、「体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表したりするなどの活動を充実するよう工夫すること」との文章が加えられている。体験活動の機会を生かして、言語活動も充実させるよう求められている。

## おわりに

はじめにも述べたように、まず、特別活動の活動内容の内容に比して、そのための授業時数が少ない。これは今回の改訂でも見直されなかった。特に今回もクラブ活動の授業時間が示されなかったことで、その時間の確保がますます難しくなるのではないだろうか。

その上で、以下のような課題も、現状ではあるように思う。

生徒指導に関わる問題は、学校教育において、ますます比重の大きなものになってきているが、特別活動を生徒指導の立場から活用しようという動きが、政令都市や県という行政単位で生まれている。具体的には、特別活動の時間に構成的エンカウンターやソーシャルトレーニングを取り入れるというような動きである。

このような動きは、特別活動の特質である、実際的な生活に根ざした自主的活動という面からいうと課題もあるように思う。日常の生活をより良いものへとするための、自主的で実践的な具体的な活動としての「特別活動」は、みんなと協力しながらより良い自分へと体験を重ねていく、生活に根ざした、きわめて実際の学校生活に密着した自治的な活動が基本である。

一方で、特別活動が場当たりのものとならないためには、自分の学級や学年、学校の課題を意識し、構成的グループエンカウンターを計画的に取り入れるなど、何らかの意図やねらいを持つ意味も大きい。積極的な視点を持って特別活動を推進することは大事である。

特別活動の自主的・実践的な態度を育てるためには、社会参画する力・人間関係を築く力・自治的能力の育成が大切であり、そのために、体験活動や言語活動そして道徳教育の充実が大事になる。また、特別活動以外の道徳や教科などが目標とする力を育成するために、特別活動の場の充実が大事になる。それぞれの教育活動は、一個の全体をなす教育活動の一部であると考えられるが、それぞれの活動の特質をより理解しながら、総合的で統合的な教育活動を行っていくことがますます求められているように思う。

「バーチャルリアリティー」という言葉に象徴されるように、現代の子どもたちは、実体的な体験が希薄になる一方、实际的で具体的な人間関係を築く体験が、少子化などと相まって、さらに希薄なっている。特別活動は、「なすことによって学ぶ」という体験を内容とし方法とすることを特質としている<sup>11)</sup>が、その重みは増している。

特別活動では、体験そのものがもつ力によって「経験の再構成」が促され、子どもの成長に不可欠な「自己更新」が導き出される。このような意味ある「経験の再構成」を増進させる教育的な関与としての「特別活動」の意義は大きい<sup>12)</sup>。

その意味からも<sup>13)</sup>、子どもの自発的活動を援助し発展させていける、教師自身の指

導力や技術的力量的の向上が望まれる。そのことが、今回の改訂を実のあるものとするのではないだろうか。

註

- 1) 新富康央著「小学校新学習指導要領の展開 特別活動編」明治図書，2008年12月，P24
- 2) 児島邦宏・宮川八岐編著「小学校学習指導要領の解説と展開 特別活動編」教育出版，2008年8月，P4
- 3) 児島邦宏・宮川八岐編著「小学校学習指導要領の解説と展開 特別活動編」教育出版，2008年8月，P6～8
- 4) 新富康央著「小学校新学習指導要領の展開 特別活動編」明治図書，2008年12月，P19
- 5) 東洋館出版社編集部編「小学校新学習指導要ポイント総整理」東洋館出版，2008年7月，P214
- 6) 東洋館出版社編集部編「小学校新学習指導要ポイント総整理」東洋館出版，2008年7月，P214
- 7) 新富康央著「小学校新学習指導要領の展開 特別活動編」明治図書，2008年12月，P20
- 8) 東洋館出版社編集部編「小学校新学習指導要ポイント総整理」東洋館出版，2008年7月，P215
- 9) 新富康央著「小学校新学習指導要領の展開 特別活動編」明治図書，2008年12月，P24
- 10) 東洋館出版社編集部編「小学校新学習指導要ポイント総整理」東洋館出版，2008年7月，P218
- 11) 児島邦宏・宮川八岐編著「小学校学習指導要領の解説と展開 特別活動編」教育出版，2008年8月，P5
- 12) 折出健二編著「特別活動」学文社，2008年4月，P119
- 13) 鉤 治雄著「特別活動」創価大学出版会，1998年4月，P45